

ヤングケアラー支援に向けたアンケート調査報告書

精神保健福祉士

令和4年7月

愛媛県保健福祉部

目 次

1. 精神保健福祉士におけるヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査概要	
（1）調査目的	1
（2）調査概要	1
2. 精神保健福祉士におけるヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査結果	
（1）ヤングケアラーの認識について	1
（2）ヤングケアラーと思われる子どもの状況	2
（3）ヤングケアラーと感じる子どもの情報提供について	6
（4）ヤングケアラーである対象者に求められるサポート	7
（5）ヤングケアラー支援で注意すべき点	7
（6）ヤングケアラー支援のための民間の連携先で考えられるところ	8
（7）ヤングケアラー支援について取り組んでいること、今後取り組めそうなこと	8
（8）ヤングケアラー支援についての課題や困りごと（その他、自由意見）	8

1. 精神保健福祉士におけるヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査概要

(1) 調査項目

ヤングケアラーについての認識やヤングケアラーと思われる子どもの有無、ヤングケアラーと思われる子どもの状況、支援の方法・つなぎ先など、精神保健福祉士におけるヤングケアラーとの関わりの現状を把握するとともに、今後の支援策の検討につなげるための質問を行った。

(2) 調査方法

一般社団法人愛媛県精神保健福祉士会に所属する精神保健福祉士を対象に、Web アンケート方式により回答を依頼した。

◆調査期間：令和3年12月10日～12月28日

◆回収状況：有効回答数26（対象者数190 回収率13.7%）

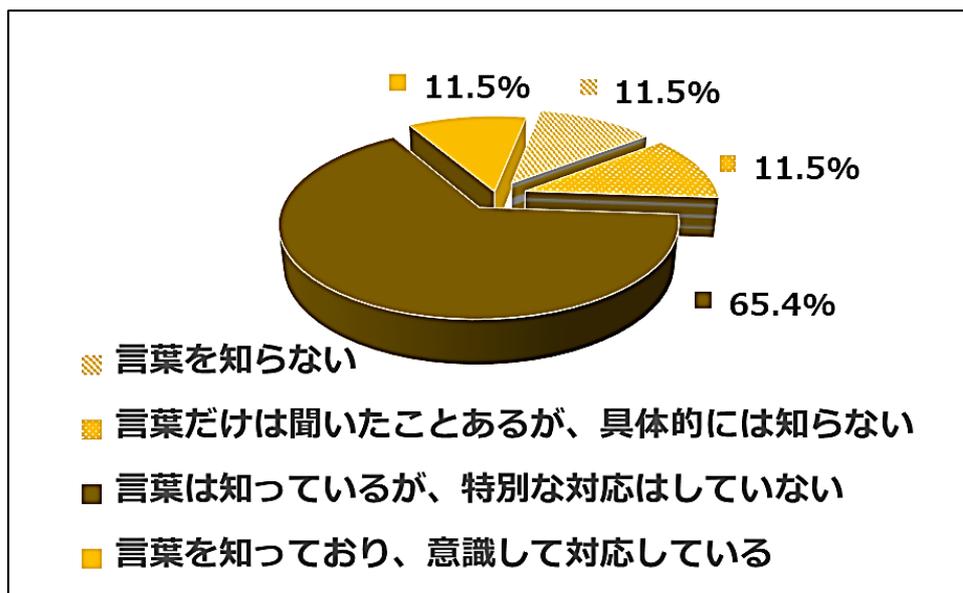
2. 精神保健福祉士におけるヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査結果

(1) ヤングケアラーの認識について

ヤングケアラーについての認識の程度

「ヤングケアラー」についてどの程度承知しているか聞いたところ、「言葉は知っているが、特別な対応はしていない」が最も多い65.4%、「言葉を知っており、意識して対応している」が11.5%となっており、言葉やその内容を知っていると答えた職員は8割弱となっている。

図表1 ヤングケアラーという概念の認識の有無

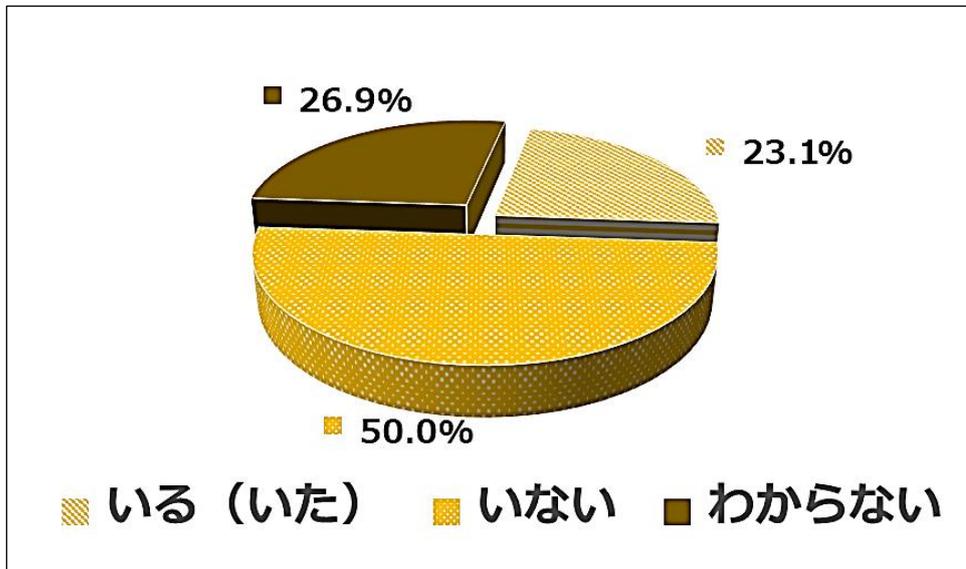


(2) ヤングケアラーと思われる子どもの状況

① ヤングケアラーと思われる子どもの有無

関わった家庭の中で、ヤングケアラーと思われる子どもはいるか（過去にいたか）を聞いたところ、「いる（いた）」が23.1%（6名）、「いない」が50.0%、「わからない」が26.9%となっている。

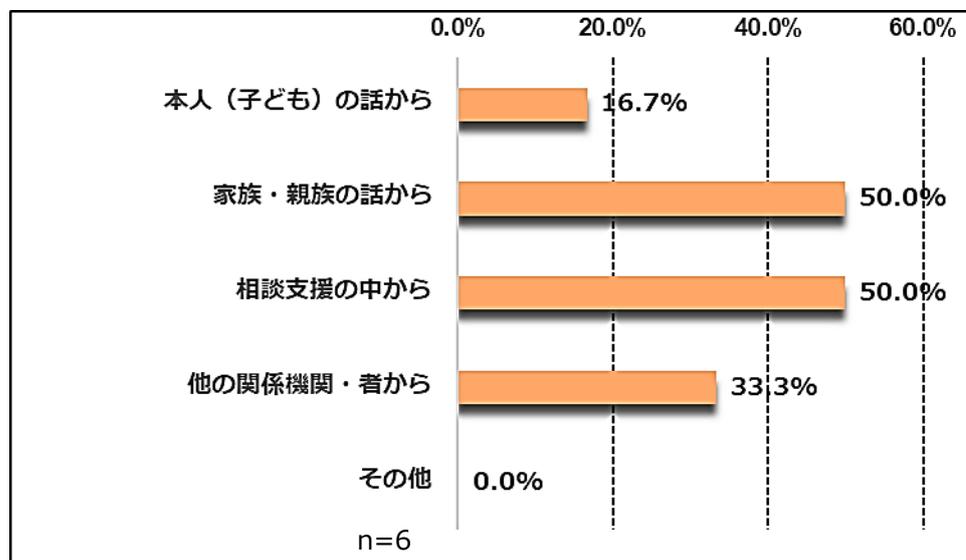
図表2 ヤングケアラーと思われる子どもの有無



①-1 「ヤングケアラーと思われる子どもに気づいたきっかけ （①で「いる（いた）」を選択した場合に回答）」

気づいたきっかけを聞いたところ、「家族・親族の話から」、「相談支援の中から」がそれぞれ50.0%と最も多く、次いで「他の関係機関・者から」が33.3%、「本人（子ども）の話から」が16.7%となっている。

図表3 ヤングケアラーと思われる子どもに気づいたきっかけ（複数回答）



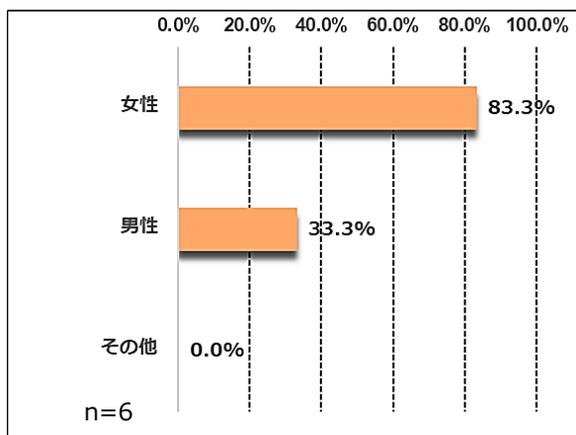
①-2 ヤングケアラーの状況について

(①で「いる(いた)」を選択した場合に回答)

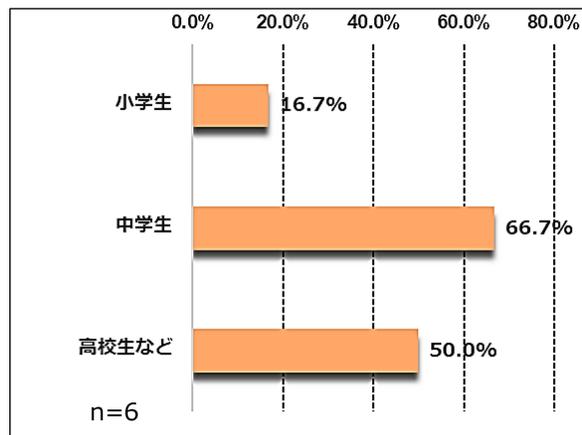
直近のケースにおける子どもの状況について聞いたところ、以下のとおり回答があった。

図表4 ヤングケアラーの状況(複数回答)

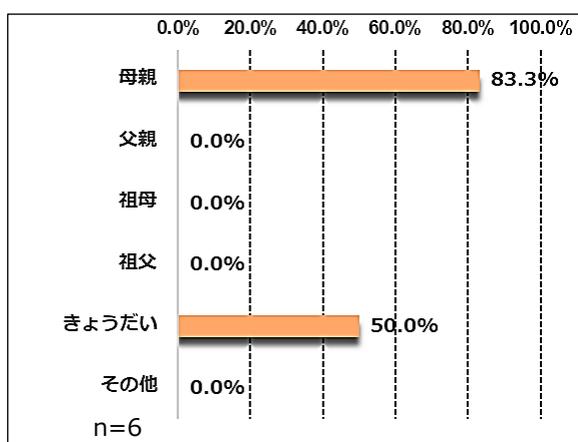
<性別>



<年代>

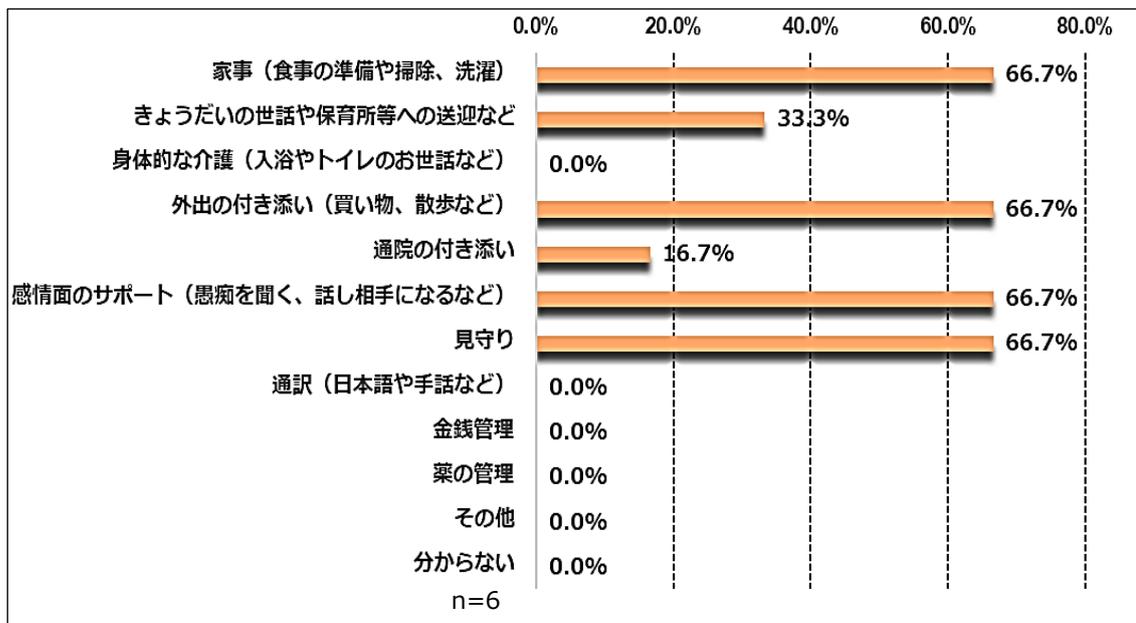


<ケアをしている相手>



<ケアをしている(していた)内容>

「家事(食事の準備や掃除、洗濯)」、「外出の付き添い(買い物、散歩など)」、「感情面のサポート(愚痴を聞く、話し相手になるなど)」、「見守り」がそれぞれ66.7%となっており、「身体的な介護(入浴やトイレのお世話)」のケースはなかった。



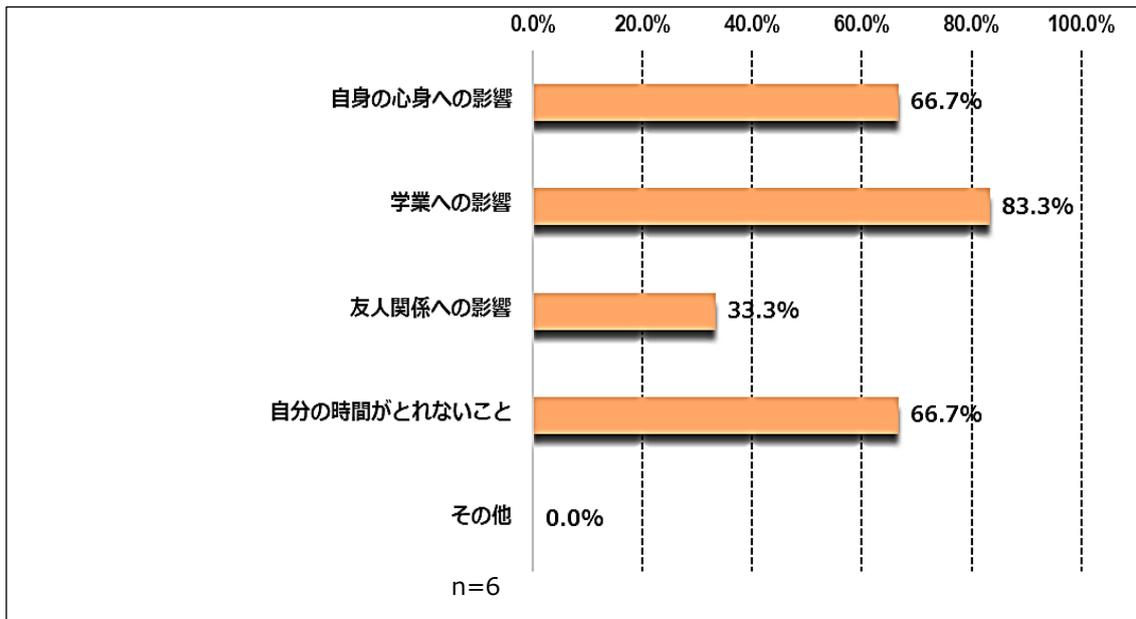
<ケアの具体的な状況>

代表的な回答は以下のとおり。

- ・小学生男児。母親が感情的に話しているのを見て、支援機関に相談するようアドバイスし、それによって母親が支援機関に連絡してくることがある。
- ・両親（40歳代）、本人（長女・中学生）、兄弟（10歳未満）。兄弟に障がいがあり、両親の育児能力や就業能力が低いため、長女が兄弟の育児や家事を担っていた。両親からみて不十分な出来だと食事を与えられなかったり、家の外に出されたりと虐待を受けていた。
- ・母（50歳代）と2人暮らしの10歳代後半の男性（定時制高校生）。母に精神疾患があるため、家事全般と母の薬管理など身体ケア以外のケアをしている。
- ・母（50歳代）、本人（女兒・高校生）と妹（中学生）の3人暮らしの母子家庭。母が精神科病院通院中で、入退院を繰り返していた。姉が買い物や食事の準備などこまめに手伝えることで生活が成り立っていた。

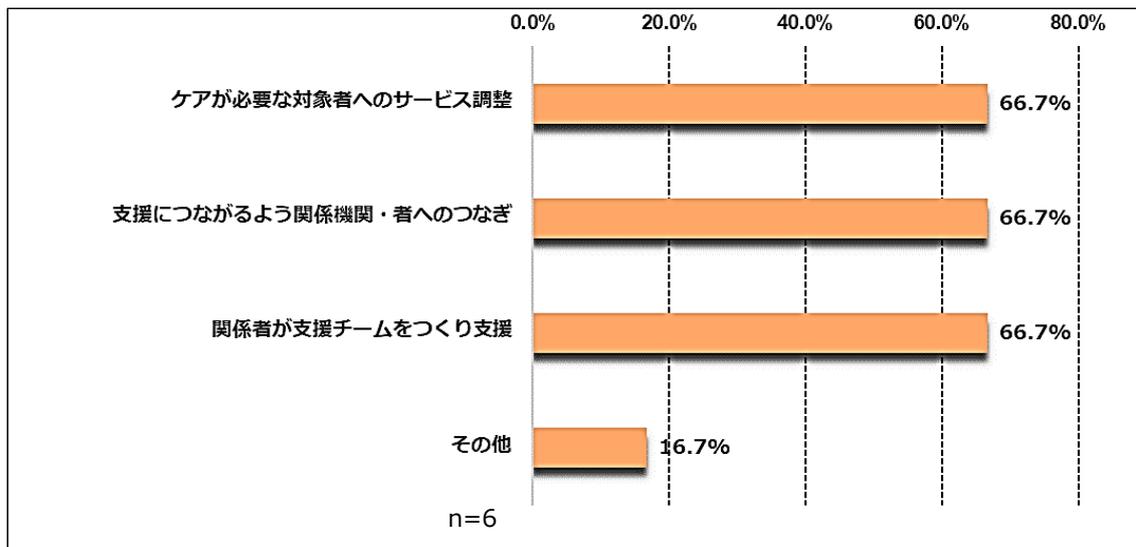
<ケアを担うことによる自身の生活への影響>

「学業への影響」が83.3%と最も多く、次いで、「自身の心身への影響」、「自分の時間がとれないこと」がそれぞれ66.7%、「友人関係への影響」が33.3%であり、生活への幅広い影響が見られた。



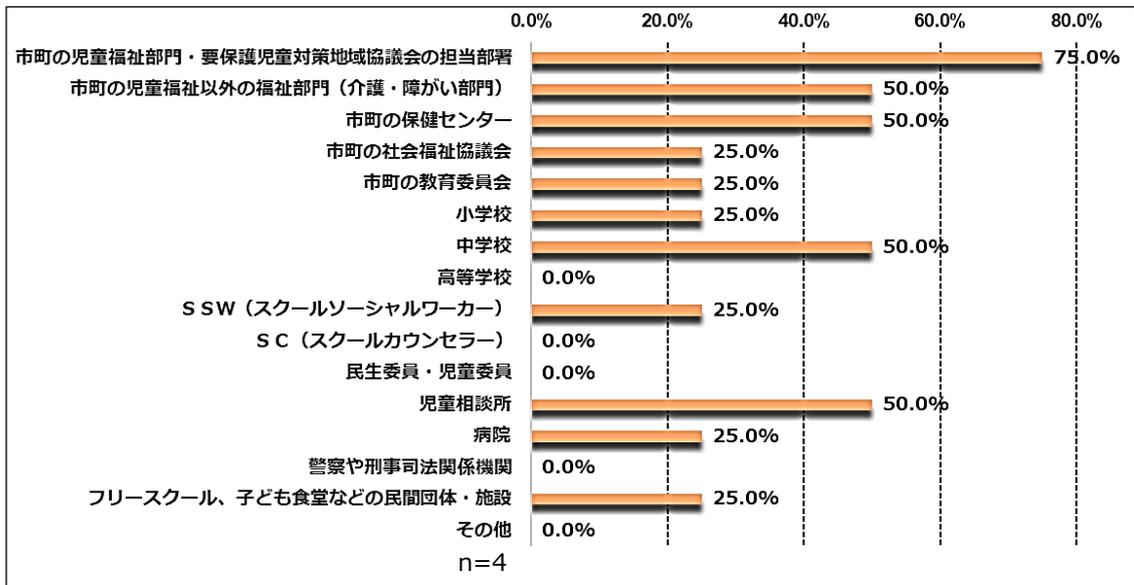
<ヤングケアラーと思われる子どもへの支援の内容>

「ケアが必要な対象者へのサービス調整」、「支援につながるよう関係機関・者へのつなぎ」、「関係者が支援チームをつくり支援」がそれぞれ66.7%となっている。また、「その他」として、「訪問看護の中で話を聞いていた」との回答があった。



<具体的なつなぎ先>

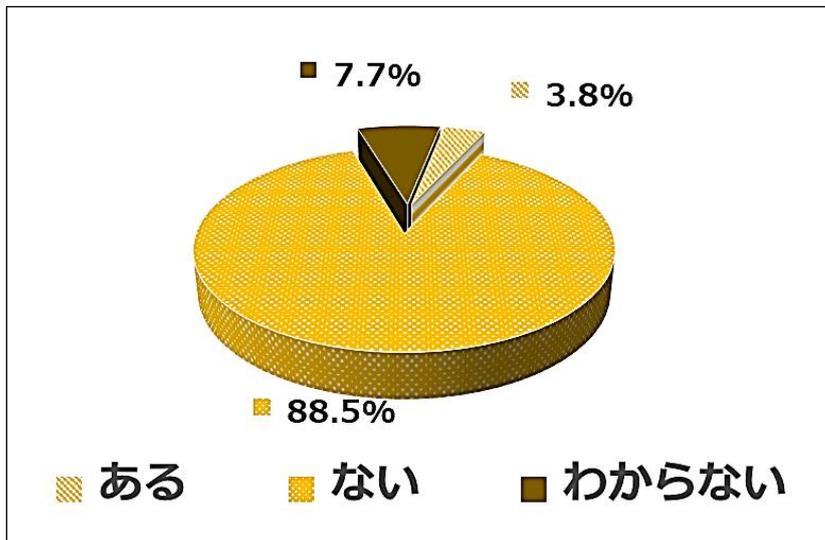
(上の質問で「支援につながるよう関係機関・者へのつなぎ」と選んだ場合に回答)
「市町の児童福祉部門・要保護児童対策地域協議会の担当部署」が75.0%と最も多く、次いで、「市町の児童福祉以外の福祉部門（介護・障がい部門）」、「市町の保健センター」、「中学校」、「児童相談所」が50.0%であった。



(3) ヤングケアラーと感じる子どもの情報提供について

- ① ヤングケアラーと感じる子どもについての関係機関・者からの情報提供等の有無
 関係機関・者から情報提供等を受けたことがあるか聞いたところ、「ある」が3.8%
 （1名）、「ない」が88.5%、「わからない」が7.7%であった。

図表5 ヤングケアラーと感じる子どもについての関係機関・者からの情報提供等の有無



①-1 情報提供等のあった具体的な関係機関・者

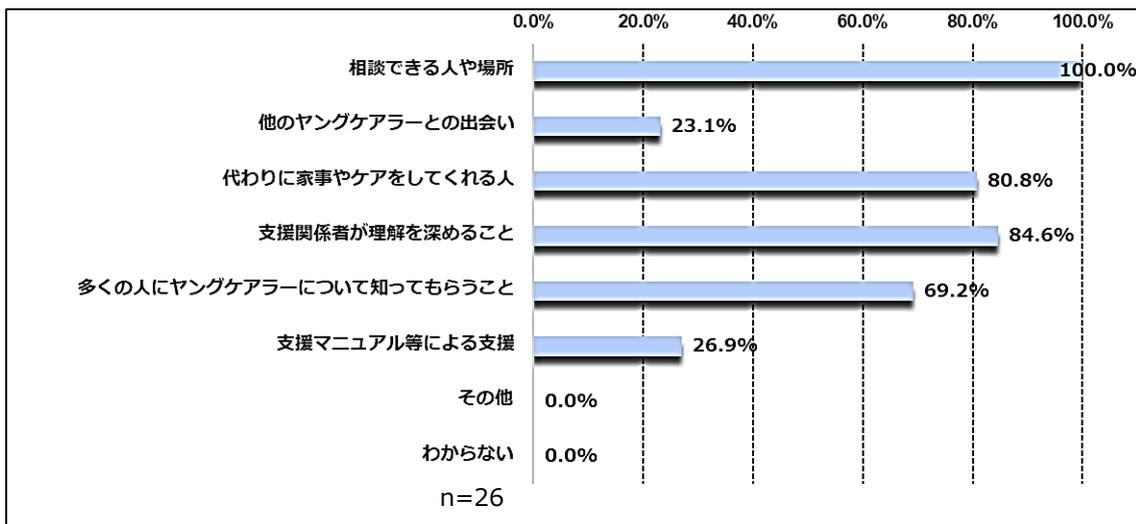
（①で「ある」を選択した場合に回答）

具体的な関係機関・者を聞いたところ、「SSW（スクールソーシャルワーカー）」、「病院」との回答であった。

(4) ヤングケアラーである対象者に求められるサポート

ヤングケアラーである対象者に求められるサポートは何か聞いたところ、「相談できる人や場所」が100.0%と最も多く、次いで、「支援関係者が理解を深めること」が84.6%、「代わりに家事やケアをしてくれる人」が80.8%、「多くの人にヤングケアラーについて知ってもらうこと」が69.2%となっている。この結果から、対象者の相談機会の充実や家庭への家事等の支援のほか、より一層の周知・啓発が求められている。

図表6 ヤングケアラーである対象者に求められるサポート（複数回答）



(5) ヤングケアラー支援で注意すべき点

代表的な回答は以下のとおり。

- ・親を非難しないこと、子ども自身を主体にした話をする。
- ・支援者側は、受容の態度とし、押し付けや提案をしない。
- ・支援者の態度や言動により、親や家族が非難されたと感じて子ども自身が苦しむことのないよう十分に配慮する。
- ・周りも支援対象者に目が向きがちで、気付けないことが多いかも知れないため、支援者側が意識したり、誰かのせいにしたりせず、上手く介入する（子どもにとっては大事な身内に変わりない）。
- ・いじめや周りの子ども達の反応が怖く、障がいのある家族の存在すら友人に言えない辛い気持ちを支えるため、メンタル面のケアが大事だと思う。
- ・ヤングケアラーと気付かれず、家族の支援を褒められたり、求められたりしてしまうことで、辛いと言い出せなくなる。
- ・ヤングケアラーにならざるを得ない状況には複雑な問題が複数あるが、家庭内へ介入できる者が少ないこと。
- ・逃げ場がない子どもであることが多いため、環境調整できるように配慮する。「疲れている、傷付いている」と感じていると思われるため、会話に注意が必要と思う。

- ・親やきょうだいはもちろん大切だが、自分の人生をどう生きるか人生設計が大切であることを本人が理解すること。
- ・役割を外れることを負担に感じないようにフォローしていく。
- ・自身から相談する事はあまり無いのではないかとと思われるので、周囲が気付いて支援に繋げる事が大事。

(6) ヤングケアラー支援のための民間の連携先で考えられるところ

代表的な回答は以下のとおり。

- ・訪問看護ステーション（要支援者のため）、子ども食堂、PTA（啓発先として）
- ・子や親の所属先、既に関係のある支援者、法律や福祉制度に詳しい者
- ・学習支援ボランティア
- ・教会や寺院など宗教関係で逃げ場があれば、心の支えになるのではないかと思う
- ・医療機関（精神科、小児科）、母子生活支援センター、障害者地域相談支援センター、児童福祉施設、フリースクール、ボランティア等
- ・放課後等デイサービス

(7) ヤングケアラー支援について取り組んでいること、今後取り組みそうなこと

代表的な回答は以下のとおり。

- ・孤食の子は同時に家事もしていることが多い。子ども食堂などの食事の場を通して課題を知ること。
- ・当事者と会ったら情報提供ができるように社会資源の確認をしておきたい。
- ・学校への聞き取り（アンケート調査）。
- ・子どもへ直接会って話したいが、なかなかできていない。

(8) ヤングケアラー支援についての課題や困りごと（その他、自由意見）

代表的な回答は以下のとおり。

- ・精神疾患を抱える親へ支援に入るときに、大抵の子どもはヤングケアラーとしての役割を果たしていると思う。しかし、子どもがいるときに親が話をしにくいこともあり、子どもに直接会える機会は少ない。そのため、直接的な支援になることが少ない。状況によっては公的な支援機関に情報提供し、子どもに関わってもらうこともある。
- ・実際困っている子どもたちをどう見つけ出すかが第一課題のように感じる。
- ・具体的にどのようなことを研修などで深めるべきか分からない。実例に遭遇しないが、埋もれているのか、そこまでの深刻度のケースが無いのか。教育現場ともっと連携したい。
- ・言葉自体もあまり周知されていないと感じる。相談窓口や専門の支援機関が分からない。家庭の中でヤングケアラーになるとなぜ困るのか、問題視されていない可能性がある。
- ・単独で関わるのではなく、多職種多機関でチームとして、途切れないよう継続して支援を行うこと。

- 問題の発覚から、具体的な解決に向けた支援がなされず放置されている状況のケースがあった。もっと積極的に家庭の問題に関われる体制が必要。
- 精神障がいのある親で育児があまり出来ず（育児放棄）、子どもが学校へ行けなかったり、子どもたちだけで食事をしたり、親の愚痴を聞いていたり等、関わった事例が何例もあった。虐待でもあり、ヤングケアラーでもあるという事例もあるように思う。ヤングケアラーのみならず、支援が必要な方へ支援が届いてないことや不足していることを感じる。